

駅員の代わりに切符を受け取るため、ホームに降りている運転手の帽子の上にも雪が降りかかって、すぐに白くなった。下車した客は若い男性が一人だけだった。ホームに人影が無くなってから、間もなく列車は動きはじめた。

(もしかして、さつき降りた若い男性はシヨートカット頭ではないか?)

前方の座席を覗いたら、もう頭はなかった。

「雪、着くまでに止むといいのになあ。おうち、駅から近いの?」

と、宮川に聞かれた。

「ええ……」

里子は、急に帰路という現実の世界に引き戻さ

れる。

しばらく黙って、窓に吹きつける雪を見詰めていると、灰色の太平洋上を木の葉のように航行する一隻の船が浮かんでくる。

淳一が乗船している『春海丸』だ。

(洋上に降る雪はどんなだろう……)

「広い海に雪降ると、視界が遮られて、船は困りますよ」

里子が口にしなかったはずの問いに宮川が呟くように答えた。

「太平洋の雪も瀬戸内海の雪も、同じなんですか?」

「冬場、太平洋で降られたら、たいていは吹雪に

なっていますよ。運行はレーダーで大丈夫なんです

が、窓ガラスなどに吹きつけられた雪は次々凍

っていきます。乗組員は荷の点検やあちこちにて

きた氷を解かさなければクラッチが入って大ごと

になりますから、大変ですよ」

宮川は、外国航路時代を懐かしむように、喋り

続けていた。

深夜の車中であることを忘れてしまいそうな

空気が二人の間に流れていた。

やがて、

「次は屋島、屋島に停車します」

静かに車内アナウンスが流れる。

里子は、急に目の前の男が見知らぬ他人だったこ

とを思い出した。

そして列車がホームにすべり込むと、

「今夜は、徳島まで寝過して本当によかった。楽

しませてくれてありがとう。おもしろかったよ」

宮川は目を細くしながら、席を立てて行った。

彼はホームを去りしなに、里子が座っている窓ガ

ラスをコンコン、と叩いて手を振った。里子もそ

れに応えた。

さつき「おうち近いの?」って彼に聞かれたとき

返事を飲み込んでしまったが、今度は里子が独り

言つ。

「彼、駅から近いのかしらん、車で帰るのかな?

それとも奥さんが迎えに来ているのかな……」

雪は相変わらず降りしきっている。

二

音もなく静かに落ちてくる雪片を車窓から眺めていたときは神々しくさえあったが、その中に入ったら、冷たくて歩くときも滑らないように一歩一歩気をつけて進まなければならなかった。おかげで手足はすっかり凍えきって里子は家へ帰り着いた。

ストーブを点け、濡れたコートをハンガーにかけて、コーヒーを淹れに台所へ行った。

電子レンジでカップ一杯分の湯を沸かして、その

のだった。

義父母が亡くなってからは、一年の大半を母子で暮らす家庭になったが、女ばかりの生活は気安くて隠しごとがない代わりに、辛辣でもあった。休暇でたまに帰ってくる淳一は、三人が交わす音楽やファッションの話題についてこれなくて、ときどきもう一人息子がいたら、とぼやいていた。

里子はコーヒーカップ片手に居間のソファアーにドカッと腰を下ろし、由良を出発してからの時間を思い、溜息をついた。東京から帰るより遠かったような気がしながら、傍らを見ると、訪船する前夜着て行く服が決まらなくて次々洋服箆笥から取り出してきた衣類が山積みになっていた。

上にインスタントコーヒーの粉を入れる。茶色の粉が湯の中でふわふわ広がっていくのを里子はしばらく見詰めたが、子供たちを連れて訪船していた頃を懐かしく思い出す。

あの頃は、港町から帰宅した長女の麻美と次女の晴海は、それぞれの荷物を放り出し「早くお茶を入れてよ」「インスタントラーメン作ってよ」などとこらえていた欲求を争うように言い募り、里子を苛立たせた。

「こつちも忙しいんだから自分のことは自分でしてよ」

勝手な子供たちを叱りながら、それを楽しんでいるもう一人の自分に気づいて、里子は苦笑したも

（あんなにして選んだアンゴラの白いセーターも淳一には着ているところを一度も見てもえなかつたな。今回は本当に寂しい訪船だった……）

里子はもう一度深い溜息をついて、カップをテーブルに置く。

それから、ずうっと気になっている留守番電話の点滅を消そうと、テーブルの端へ手を伸ばし、再生ボタンを押す。さつそくローヤルゼリーのコマーションシャルやら保険の勧誘やらが勝手に喋っては、消えていくのをボンヤリ聞き流していると、

「じゃ、行ってくる。元気で風邪引くなよ。ゆっくりしたら、また手紙書くから」

淳一の少し掠れた声が風の音のような雑音とともに

に聞こえてきた。

その声が消え去ってから、急に部屋の中が静まったので、もう終わりかな、と思つて風呂を沸かしに立とうとしたときだった。

「里ちゃん、帰ってきたらちよつと私のところへ来てください。お願いします」

今度は遠慮がちなハルの声でした。

彼女は淳一の亡くなった母親トミエの妹だが、晩年あまり姉妹の仲はよくなかったので、表だつてつき合うことはなかった。

ハルの夫は東京で商社マンをしていたが、毎日自分を殺して生きるのに嫌気がさして、故郷の香川へ帰り、居酒屋をはじめた。それを容認し、

話題は、避けるように気をつけていた。

トミエが亡くなったのは、麻美と晴海が都会へで行き、里子と二人きりの生活になってからだった。胃癌を患い、しばらく入院を繰り返す日々が続き、里子はそのたびにトミエの身の回りの世話に追われた。最後を看取ったあと、ホツとする間もなく葬儀の準備が待っていた。

義父の次郎が亡くなったときは、運よく淳一が休暇中だったので、助かったが、トミエのときは、あいにく太平洋上を航海中だった。困った里子は、淳一の妹に助けてもらおうと早々に知らせたが、只今出張中なので、帰るまでよろしく頼む、とい

夫といっしょに店で働くハルを、性格が地味で堅実派だったトミエは理解しようとしなかった。

サラリーマンの妻だったはずの妹が、居酒屋を止めたあと、模様替えて喫茶店を経営するなど水商売から離れない。トミエはそんな生き方を嫌つて、ハルをあまり家に寄せつけなかった。

しかし淳一とハルは気が合うのか、麻美が生まれるまで里子を伴つてときどき『はまゆう』へ遊びに行っていた。

子供ができてからの里子は育児に追われ、ハルの店へ顔を出す機会はだんだん減つたが、淳一は相変わらず友人たちと連れだつて行っていたようだ。しかし気の強いトミエの前で『はまゆう』の

う返事がかえつてきた。四十を過ぎても彼女は独身だったので、営業の仕事で飛び歩いていた。

疲れで回転が鈍くなった頭と、鉛が入っているような体を引きずるように、葬儀屋や隣組の人らの応対に里子が追われていたら、ハルが駆けつけてくれた。彼女は、享年七十三歳だったトミエより十歳下だったので頼りになった。

通夜で里子と二人きりになったとき、

「嫌われていたいうても、二人きりの姉妹やから……。小さい頃はいい姉さんだったけど、次郎さんと結婚してから少しずつ嫉妬深こうなつてな。それも姉さんが悪いんじゃない。次郎さんの浮気癖がいけないんだつて、思うことにしてたわ」

ハルは耐えていた心情をこう語った。

トミエもいつか、妹のハルと自分を比べて、

「あその夫婦は仲がよすぎて子供ができなかったけど、うちみたいに、しよっちゅう浮気の心配ばっかりさせられるより、いいかもしれんな……。夫に裏切られ、その尻拭いをさせられるくらい腹の立つことはないで」

そんなふうに通っていたのを里子は思い出した。

「次郎さん、ときどき女の人と同伴でうちの店に来てたけど、こつちも商売だし、嫌な顔をする訳にはいかなかった。たぶん姉さん、うちに来てること知ってて、自分だけが除け者にされているような気分になったんじゃないかな……」

ハルは幸せになれなかった姉を悼むように、つけ加えた。

なあんだ、義母さんは、ハルさんを嫌っていたのではなく、妬いていたのか……。

里子はいつも気難しい顔をして、黙り込んでいたトミエの寂しそうな横顔が今でも忘れられない。

女道楽の絶えなかった次郎はいつも身ぎれいに

してサングラスをかけ、トミエと歩くときは、一

メートルくらい先を行った。

「俺は親父のようにはならない。あんなのおふくろが可哀そうだよ」

母をないがしろにする次郎に反発するかのよう、淳一は服装にかまわなかった。里子とデートする

ときもよくジーンズに下駄履きと、バンカラ学生のようなスタイルで現れたものだ。

そのくせ親思いなのか、金使いの荒い次郎に甘かった。結婚しても自分の給料が振り込まれる預金通帳を自由にさせていた。里子に家計のやりくりを任せられたときは、淳一が船会社に入ってからつ貯めたお金も次郎にちやっかり抜かれ、無一文同然だった。抜いたその金もすぐに使い果たしたのか、それからもときどき淳一の給料の明細に返金欄が加わっていた。

会社から給料の前借までして次郎に金を渡す淳一を里子が責めても、言い訳もせず、

「あんたが思いたいように思ってくれていい」

不良息子を庇う親のような態度を取るのが、歯がゆくて、夫婦喧嘩も度々した。

(以上6月24日放送分)